第86回

健康のススメ

板東 浩

先日、徳島ホールで「獵銃」の朗読劇を楽しんだ。原作は井上靖氏で、今年が生誕100年。スリリングな物語をドラマチック・リーディングしたのは仁木てるみさん。3人の女になりきり、全く異なる声色で舞台を演じきった。聴衆の心には無限の世界が広がるようだ。人が発する声は言霊ことだまであり、重厚なパワーを内在しているようだった。

私が注意していたのは、BGMとして流れる音楽との相性。心情の変化に沿った雰囲気まで、バランスや間合いまあも良い。以前に一世を風靡したラジオドラマの手法とほぼ同じ。目を閉じてドラマの世界に引き込まれていくと、不思議な感覚わあが沸き上がってきた。仁木さんの声が、次第に抑揚よくようがある歌に変貌へんぼう。つまり、小説という言葉に、旋律が加わったかのようだ。

ちょうど同時期に、映画「ラブソングができるまで」を東京で観た。ストーリーは、往年の男性ポップスター歌手と、言葉に感性豊かな女性ライターと一緒にヒット曲を作るというもの。英語題は[music & lyrics]であり、音楽と歌詞、作曲と作詞という意味だ。男は「メロディが人間の外見」と言い、女は「歌詞は人間の心」であると言う。

以上を比較してみよう。朗読劇では言葉が旋律で音楽は背景。映画では言葉と音楽が融合している。「曲」とは、欧米ではほぼ楽曲や歌に限定されるが、日本では歌舞音曲かぶおんきょくなど広い芸能を含む。音楽と歌詞、歌と詩、外見と内実、男と女。これらは相互に引き合ったり反発したり。こんなプロセスを経て統合し完成していくのであろう。(医学博士、内科医師)

「反発と融合」